

竹本駒之助
女流義太夫一代記

【チラシ使用写真】竹本駒之助24歳結婚式当日 神田明神にて

芸の母・春駒（竹本春駒）と一緒に湯島の三生（鶴澤三生）の家にお嫁入りしたのが昭和三十四（一九五九）年。翌年に長男が、さらに六年たつて長女が生まれました。

湯島から秦野に移ったのは昭和四十八（一九七三）年です。喘息を患っていた三生に転地療養の話が出ていたのと、ちょうど東海大学医学部ができる時で、その寮を作ってもらえないかという話が持ち上がったことからです。三生のお弟子さんに東海大学の理事の方がいらして、その方のツテもあって転地が決まりました。医学部一期生四十人を一気にあずかることになり、いきなり寮母の生活が始まったのです。お手伝いさん二人に来てもらって朝食

と夕飯を準備し、買い物は主人が担当。お料理も習いました。朝は、子どもが六時の電車に乗るのに間に合うよう送りだし、夜は片づけをすると十二時すぎましたから、一日二十四時間では足りない忙しさでした。いま自分の時間がいっぱいあるのに、それでも足りないくらいですから、あの時はよくやっていたなと思います。

寮は十年ほど続けました。一時期は四十五人ほど預かることになり、倉庫を二つ作って、長男の部屋まで使っていました。が、これはもう……と思いついたときに国宝のお話をいただいた、それをきっかけにやめることになったんです。

もう一つ大変だったのが二人の母の介護です。結婚して五、六年経った頃、春駒の認知症の症状があらわれてきました。舞台で本を見てても物忘れするとか、言葉が出てこなくなるといったことが起きるようになったんです。片づけるために大阪の家に帰ると、電車の途中でわからなくなつて、車掌さんから電話がかかってくることもしょっちゅうありました。

春駒は頭がものすごく大きい人で、

義太夫の本もなんでも丸暗記していたんです。めつたに舞台にかからないものでも、みんな覚えていて。ラジオもテレビも昔はみな生放送でしたから、穴があいたとき、咄嗟でも一時間きちんと埋めることができる人だったの。春駒さんに頼もうということがよくあつたそうです。認知症になつてからも、義太夫のことだけは頭が冴えていて、ベッドでも義太夫を語るので、院長先生が驚いていらつしやいました。

私の稽古について来るのが大好きで、患ってから一緒に行きました。が、困ったのが大きな声でおかしなことを言うことです。お稽古にいらつしやる若いお弟子さんを見て「あれみな芸者はんだっか？」。帰りに小田急線に乗るために新宿駅で並ぶと「どえらい並んでまんなあ」。混雑の車中で立っている人を見て「小田急はどえらい儲けてまんなあ」。義太夫の人特有のものすごい大声なので、まわりの方に吹き出されて恥ずかしい思いをしましたが、関西弁で、しかも言うことが憎たらしなくて可愛らしい。帰りにどこかで食べさせてもらうのも楽しみ

なようで、なんだか子どもに戻ってしまった感じでしたね。ただ、男の人が好きなものには困りました。お客様が来て、主人が出ていくと、その隣にぴたと座ってしまうんです。男性のお弟子さんがみえるたびに「(駒之助師匠の)コレだっか?」と言うんですよ(笑)。かつては厳しい師匠でしたが、ずいぶんと変わってしまうものです。

春駒の認知症がひどくなった頃、今度は三生に肺がんがみつかり、うちで養生することになりました。春駒一人なら面倒みられるのですが、二人は無理なので、春駒を老人ホームに預かっていただくことにしました。病院や老人ホームとの行き来でたいへんでしたが、その間、家族がいるということは、本当にありがたかったなと思います。主人と子ども二人、お手伝いの方もきてくれていました。

子どもは二人とも東京の学校に長距離通学でした。小田急の駅まで車で送り、あとは近くの方たちがランドセルを網棚に上げてくださったり、降りるときも面倒を見てくださったりです。通学が大変でしたし、学校のことで充分と思いました。から、稽古事はなにもさせませんでした。二人とも義太夫とは無縁の道に進みましたが、母親のやっていることを恥ずかし

がらず、わかってくれていたのはありがたかったです。

寮をやっているときも、母の介護のときも、とても義太夫は続けられないと思う時期が何度もありましたが、越路師匠(四代竹本越路大夫)が「時間がないなかでやるからこそ覚えられる。どんなに大変でもやめてはいけない」と言って協力してくださったのが、とても励みになりました。仕方なく娘をお稽古に連れていくこともあったのですが、師匠が直してくださると娘が師匠の顔をじーつと見るんです。「これはすごいぞ、この子はきちつと覚えとるで」と言ってくださったり。学校のことも気にかけてくださいました。

今回語らせていただく『鎌倉三代記』八ツ目切「三浦別の段」を最初にお稽古したのは、中学出たての頃でしょうか。大阪で女の方がお稽古にみえる、豊沢団友師匠に、三ツ目くらいに教えていただきました。まだ私が、義太夫を嫌々やっていた時期ですね。何年も経ってから若大夫師匠(十代豊竹若大夫)に稽古をしていただき、またいろいろな文楽の御師匠様方に聞いていただきました。いずれも高綱物語まで

で、その後は一度もやったことがありません。今回が初めてです。主要人物は三浦之助、時姫、高綱の三人です。時姫は敵方の三浦之助を慕って、押しかけて三浦之助の母のお世話をしている。本来は敵味方の関係である、時姫と三浦之助の母の二人が腹のなかでどうしていくか、一番聞いていただきたいのはそこだろうと思います。今回も気持ちをこめて、語らせていただきます。



【写真】二〇一五年十月公演のチラシ

KAAT

KANAGAWA ARTS THEATRE